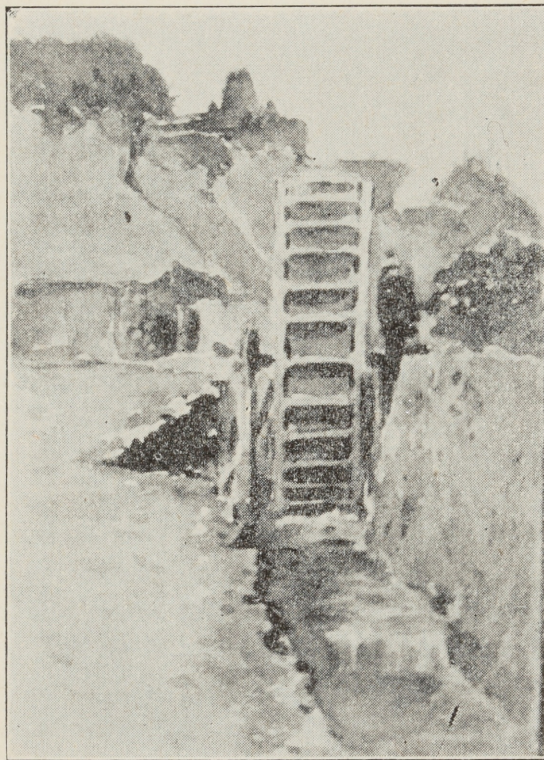


菱花灣日記 〔三〕

目 録

二月一日 晴、港へ出て見るに出船入船いと繁く、狭き濱邊は人あまた集ひ居て三脚据ゆべき場處もなし。去つて町を東に山路に入る、磴道幾百級、みな岩を刻みしものにて道は急なり、山を越ゆれば村あり、岩井袋といふ。三方絶壁に、只西の方僅かに海に接せり、水靜かなる小灣を圍める漁村幾十棟詫しげに建てり。更に一の峠を越ゆれば高崎といふ町に出づ、この地鹽水汲むべき井戸ありて夏は溫浴の設けあり、旅宿も稍や見るべきものありといふ。

道ありとも思へぬ浪打際を小浦の方へとゆくに、大なる巖を前景として寫さまほしき景色あり、風寒けれど繪具箱出して一枚を得つ。近くに海苔搔き居りし子供等の、いつか吾が背後に來りて、水の色岩の形に類りに感嘆の聲を放ち居たりしが、其内の一人『この繪は一錢位すべし』といふに、他の一人は『馬鹿口ふな百圓クレイするだア』と、この小さき鑑定家は、忽ち評價に非常なる懸隔を來して互に相争ひぬ。



大橋正亮筆

三度山に入りて到る處梅花の美しきを賞てつゝ、山人に那古への道を問へば、これより後へ半町程左への道あり、今方荷を積みし牛のゆきし故、それと共にゆかば自から里に出づべし、急ぎ給へといはるゝまゝ、戻りて見れば又も上りの山道なり、牛の瓜跡も僅かに見ゆ。

道の漸く下りに向ひし頃遙かに牛の影見ゆ、急ぎその跡を追ふに、この牛四五束の薪を負ひ、後ろよりゆく農夫に竹の鞭もて尻を叩かれ、牛の歩みのそれならで馬よりも早く、つゞら折なる山路に屢々其姿を見失はんとしたり。

さばれ鶏口となるも牛後となる勿れといふ諺あり、いつまでか恚る醜き小牛の跡に立たんやと、大勇氣を奮ひ起して危ふき坂路を馳せ下るに、道は漸く一人を行く程の狭きなれば、褶褌を先ずるとかたく、終に南無谷ナムヤの村迄蹄の塵を浴びぬ。

漁村を過ぎてまたも山を越せば豊島なり、富士も見ろべく、海には島もありて風光佳なり。これよりは平地を、多田良、船方、那古、湊、八幡と、順路を五時過る頃戸松の家に歸りぬ。

二日 少しく雪ふる、加知山へゆきし折、家の屋根に藁にて造

りし輪の置けるを見たり、故ある事もやと主翁に問へば、このほとりにては、新婚の折ホカイとよべる桶に餅を入れて祝ふが例にて、其ホカイの縁にかの藁の輪を乗せ、餅を高く盛上るなりとか、家根の上にもこのものあるは新婚ありし印なりといふ。

三日 晴、節分なり。豆まきは正午過る頃より始まり、かなた此方に福は内の聲にぎはし。

四日 曇、海を寫す。

五日 曇、北上臺の社殿を寫す。

六日 晴、船を寫す。

七日 雪あり、羽鳥氏と共に東海岸にゆく約あり、毎日待てども來らず。

八日 晴、久しく厄介になりし戸松の家を辭して、羽鳥氏と共に根本さしてゆく、館山より三里の道なり。羽鳥氏の知人ある海潮寺に宿かる、寺には年若き住職と、七十餘りの起居不自由なる老訥一人あり、拭き掃除より勝手元迄、住職一人の業にて、夜に入りては村の子達に四書の講義もなすとか、中々に忙しげなり。

長き廊下を傳ひて、奥まりたる處に吾が臥床は設けられぬ、後ろは本堂なるらし、夜半の風荒れて破戸自ら聲をなすに、淋しさ怖ろしさ云はん方なし。

九日 雨、雷鳴あり。食事のおり膳の隅に白布の濡れたれる置きり、口拭ふためにもやと思ひしが、こは食器をこれにて拭ひ、その儘洗はぬ輕便法なりし。

午後より大雨となり雷鳴烈し、さきつ年此村の子守達、雨を避けて鎮守の神樂堂に集まりて遊び居りしに、俄に雷落ちて、三人迄も非業の最期を遂げたりといふ。さて今日の雨も容易に歇



(三) 續成會習講野長

まぬに、僧は小降になりてから米磨からんとて、終に夜に入りぬ。夕の食事の膳に就きしは夜半に近き頃なりし、吾は徒らに勝手元を眺めて、仙代萩飯焚の場を想へり。

十日 晴、西風つよし、海岸にゆき見るに、怒濤狂瀾館山灣の

比にあらず、この風一日にして歇むべきにあれば、午後より出發に決す。食事の度毎に強らるゝ大根汁にも最早飽きたれば。

風に追はれて半は走りつ、白濱もいつか過ぎて、千倉チクラの旅舎渡邊に着きしは四時を過ぎたり。今日は濱方休みにて、時經たば混み合ふべきに、早く風呂に入り給へといはるゝまゝ、急ぎ浴場さしてゆき見れば、セピアにて塗りしかと思はるゝばかりの黒き人々、狭き浴室に満ちくゝて、湯槽には脚を入れるべし透間さへなし、そが中には年若き婦人さへ混り居るに、益々呆れて脆くも退却しぬ。

十一日 晴、左に小山を、右に海を眺めつゝゆくも二里、丸山川とよべるあり。九日の雨に水嵩増して、橋は流れ、濁流岸を洗へり。籠負ひし女子共の笑ひ興じつゝ、川を涉りゆくに、他に道なければ我も足袋脚絆を解きて流れを亂しぬ、川幅二十間に餘り、寒冽たとへ難し。

ナブト波太島のほとり、思ひし程景色よからず、スケッチ一二を試み、それより道を急ぎて、鴨川、濱荻も空に過ぎ、天津の井筒屋といへるに宿る。この家取扱極めて鄭重に、枕元には水瓶にコップ、蠟燭マツチの類を置けり。

十二日 曇、小湊誕生寺を見る。鯛の浦は彼處ごと里人に教へられしが、岸よりは鮮けき鱗の影も見えず。此處より勝浦迄新道あり、興津に至る一里の間、一方は海に一方は絶壁にて、岩の質脆きためか、折々崩れ來りて行路危ふし。興津は景色よき

處なり。近海昨日より鯛の大漁なりとて、何處の漁村も鯛ならぬはなく、乾鯛にすとして砂濱に晒せるもの、恰も多摩川原に砂利の光れるがごとし。舊曆歳の暮とて、市たちて賑ひし勝浦の町を過ぎ、白鷗群れ飛ぶ御宿オンジツクも跡にし、畫かまほしき景色に富む大原の海も見捨て、俣急がせて、上總一の宿に着きしは薄暮の頃なり。宿を東金屋といふ、客多くして室を得がたく、川村畫伯の親類なりといふ某辯護士と一夜を共にし、同畫伯にかゝる面白き話の數々をきしぬ。

十三日 雨、滞在。

十四日 晴、俣を雇ひて北飯塚に知人を訪ひ、大綱より汽車、夜に入て家に歸る。房州根本の湯は、既に梅花地に委し、菜の花盛りなりしが、上總は稍寒く、下總に入つてはまた花を見ず、地上雪ありて寒風膚を刺せり。春より再冬に戻るれか旅なればこそ。(終)

蛇の急所

蛇の大小に拘はらず頭から約一寸程下つた處即ち首の附け根の脈を打つてゐる處を打てば直ぐ死ぬ。

齒の毒

蝮に噛かまれたら直ぐ一番近い處を固く縛つて又少し隔つた所をもう一つ固く縛る、そして噛まれた處を突て血を抜とよい、紺氣のものは蛇の齒の毒を消すから足袋脚絆の類に紺を用ゐると痛みだけで済む、但眞紺でなくてはいけぬ。(趣味)